

とちテレ報道特集「とちぎ戦後 70 年」シリーズで全 5 回放送

戦後 70 年を迎え、記憶を風化させず平和を考えようと、県内でも各地で様々な人が活動しています。戦争を経験した世代は減り、改めて「声」に耳を傾け、「残す」ことの意義も問われています。とちぎテレビでは、人々の「思い」を映像で伝える「とちぎ戦後 70 年」をシリーズでお伝えしています。

8 月もニュース特集として 5 日間にわたってお送りします。



【8 月 10 日（月）放送】

戦時中の様子を伝える史料は、空襲などで残っていないケースが多いのが現状です。新聞も例外ではありませんが、このほど、終戦を伝える昭和 20 年 8 月 16 日付の下野新聞が見つかり、持ち主の男性が新聞社に寄贈しました。終戦時の県内の動きも伝える貴重な史料。小学生の時に見つけ大切に保管してきた男性の思いを探ります。

【8 月 11 日（火）、12 日（水）放送】

70 回目の原爆の日を迎えた広島と長崎。歴史を学び、悲劇を後世に伝えようと、県内各地でも多くの児童・生徒が被爆地を訪れました。今回は、宇都宮市から広島に派遣された中学 2 年生 25 人を追い、被爆地で何を考えたのか、またこれから栃木でどのように伝えていこうと思ったのか、2 日連続でお伝えします。

【8 月 13 日（木）放送】

来年 100 歳を迎える那珂川町の女性は、東京で理容師の男性と結婚し、幸せな生活を送っていましたが、夫に召集令状が届き、部隊は満州で全滅。さらに栃木へ里帰り中に東京大空襲があり、帰る場所がなくなりました。夫をなくし、家をなくし…戦後 70 年たって改めて思うことを語っていただきました。

【8 月 14 日（金）放送】

栃木市の男性は中国で従軍し、シベリア抑留を 4 年経験しました。多くの仲間がまだ凍土に眠り、戦場では民間人を銃剣で攻撃するような惨状も経験。これまであまり家族にも語らなかった「戦争の真実」を、70 年たった今語っていただきました。また、日本人とは何かを問う作品を多く残した作家、司馬遼太郎さんは、陸軍少尉として佐野で終戦を迎えました。歴史的作家が栃木で経験したこと、そして語り継ぐ意義を考えます。

放送する番組

イブニング 6（よる 6 時～）・ニュースワイド 21（よる 9 時～）・ニュースとちぎの朝（翌日のあさ 6 時 30 分～）

※放送内容は、変更する場合があります。



本件に関するお問い合わせは
企画編成部 広報担当 田中 TEL:028-623-0082